

生活史／ライフストーリー

ヒストリー／ストーリー

- ◎ ライフヒストリー
 - ・ 実際に、一人の人間の生きた歴史
 - ・ 客観的な個人の生活史（神がそれをすべてお見通しとすれば）
 - ・ 客観性→リアリスト派の立場
- ◎ ライフストーリー
 - ・ 研究者やジャーナリスト（質問者）に対して、個人が語った人生の出来事（物語）
 - ・ 主観性→アンチリアリスト（テキスト）派の立場

テキスト派のアプローチ

- ◎ 立場
 - ・ ライフストーリーは、「生きられたヒストリー」とは無関係に、主観的に再構成された言説にすぎない。
- ◎ 関心の対象
 - ・ 言説、語り、表現
- ◎ 領域
 - ・ 臨床心理学、マイノリティスタディーズ、社会言語学、文学研究など

リアリスト派のアプローチ

- ◎ 立場
 - ・ 個別の語りの中に、固有の客観的なライフコースの存在が認められる
- ◎ 関心の対象
 - ・ 状況的なカテゴリーを共有する人びとのライフコースとそれに係わる諸要因
- ◎ 領域
 - ・ 社会学（社会移動研究）、教育社会学、文化人類学など

ライフストーリー研究の展開例

- ◎ 人生の物語として（テキスト派）
 - ・ 社会化の過程の記述と解釈
 - ・ ナラティブなストーリーの構築→自己覚知
 - ・ マイノリティのアイデンティティ
- ◎ 生活の歴史として（リアリスト派）
 - ・ 個人史<集団史<社会史
 - ・ 書かれた歴史（支配）vs語られた歴史（従属）

リアリストアプローチの戦略1

- ◎ <状況のカテゴリー>を共有する人びとを対象に選ぶ。
 - ・ 状況のカテゴリーとは
 - 子育て中の母親 ○ キブツに暮らす独身者
 - × 年収300万円の世帯 × 自己実現したと感じている女性

◎ 参考文献：ダニエル・ベルター（小林多寿子訳）『ライフストーリー：エスノ社会学的パースペクティブ』ミネルヴァ書房

リアリストアプローチの戦略2

- ◎ 同じ社会対象から得られた＜語り＞を並べる
 - ＜繰り返し＞の発見
 - ＜語り＞の多様性の比較
- ◎ 社会的な次元に対応した＜核＞を取り出す

具体的方法

- ◎ インタビュー 口述の記録
 - インタビュー
 - 時間軸にそったライフイベントとファクトの発掘
 - ライフドキュメント
 - 公的記録、日記、写真など
- 記憶と書かれた記録とのつきあわせ

＜語り＞の持つ特性

- ◎ 伝記的幻想（ブルデュー）の問題
 - 支配的な地位をもつ人びとは、自己のライフコースを一貫性のあるものとして表現する
- ◎ 結晶化した語りの問題
 - ＜語り部＞の無意識に演出された物語
- ◎ 統合化の問題
 - 回顧的な＜語り＞は、人生のさまざまな出来事の中に、統合的な関係があるように意味づけしてしまう
- ◎ 語られない物語の意味
 - 抑圧された記憶、無意識の否認

＜語り＞を記述する過程の問題

- ◎ 読者の関心
 - 調査者がフィールドでみつけたものだけを知りたいのではなく、フィールドワークの過程（なぜそのフィールドを発見したのか、いかにして調査者は活動したか）も知りたい
- ◎ ライフストーリーの編集
 - 削除とモンタージュのみが、注釈付きで、許される。